

甲府市湯村における温泉観光地の形成過程

浦 達雄*

はじめに

わが国の地理学研究の中で観光地域の形成過程については、山村順次などが精力的に研究を進めており、特に温泉地を事例として数多くの研究成果が発表されている。その視点は、観光開発の主体である観光資本の動向に注がれ、その変質過程を実証的に論述している¹⁾。

この報告は、甲府市湯村を事例として、温泉観光地の形成過程の実態を明らかにしたものであり、特に、現存旅館の悉皆調査によってその観光資本としての性格を詳しくみることにした。これによって観光地の形成に関して時期区分を行い、それぞれの時期の特徴を概観する。

I 湯村温泉の概観

湯村温泉は甲府盆地北部、甲府市街地西北部に位置し、行政上は甲府市湯村三丁目を中心に立地している。湯村は近世以前は山梨郡北山筋の松島庄に属していたが、近世には中郡湯島村、続いて湯村と称されるようになった。1875年(明治8)1月には湯村と山宮村および羽黒村が合併して、西山梨郡大宮村大字湯村となり、1942年(昭和17)4月には甲府市と合併して甲府市湯村町となった。現在の湯村三丁目という地名は1970年3月の住居表示改正の結果

生じたものである。

1971年現在、湯村の温泉集落(図1)は湯村山(海拔439.2m)の南西麓、海拔約280mの地点に立地している。旅館、土産品店、飲食店などの観光施設は歴史性を有する共同湯「鷲の湯」を中心に湯村入口から福田山塩沢寺に至る道路(延長約500m、幅4~8m)沿いに集中している。また、旧関屋往還(現在の県道甲府—敷島—韭崎線)沿いには、第2次世界大戦後に成立した比較的新しい旅館が市街地の中に点在しているが、甲府の都市化がこの付近にも及んでいるため、純粋な温泉集落を形成するに至っていない。なお、湯村温泉の観光施設の内訳は、旅館29軒、寮・保養所2軒、土産品店3軒、飲食店11軒、タクシー会社3軒、浴場2軒、マッサージ4

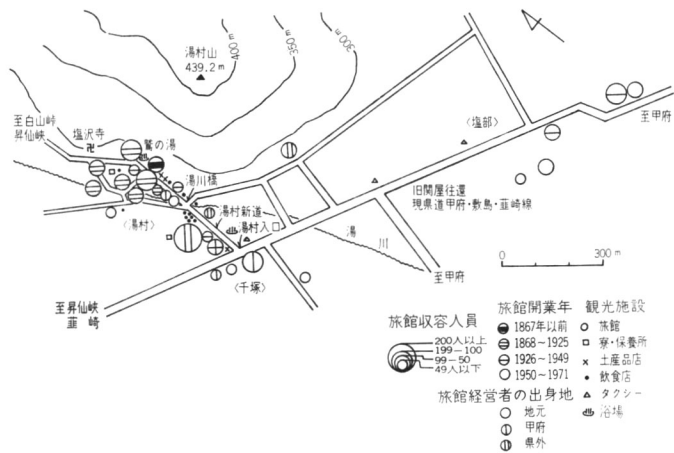


図1 湯村における観光施設の分布(1971)

温泉集落の中心部についての分布状況であるが、飲食店は旧湯村町、旅館は旅館組合加入の現存業者に限った。なお、本図は筆者の聞きとり調査をもとに作成。

* 川崎市立工業高等学校・教諭

表1 湯村温泉の発達段階(1972)

筆者の聞きとり調査等により作成

時期	性格	年号	観光資源	観光施設・観光組織	交通・観光客
第1期	湯治場としての成立期	808	大同3 湯村温泉発見(?)		
		(江戸)1656	明暦2「甲陽軍艦」に島の湯として記載		
		1684	貞享1「御検地御水帳」に湯村として記載		
		1751	宝暦年間「裏見寒話」に湯村として記載		
		1814	文化14「甲斐国志」に湯村として記載		
第2期	湯治場としての発展期	(明治)1873	M 6項 山梨権令藤村紫郎 鷺の湯再開発		M 6項 藤村紫郎 湯村新道開発
		1877	M10項 地元農民 私有泉掘削(2本)	M10項 内湯旅館開業(2軒) M40 地元地主 旅館開業	M12 浴客約2万人 M36 中央本線甲府一八王子間開通. 甲府—湯村間私有馬車人力車運行
		(大正)1923	T12 御岳昇仙峡名勝指定	T 9 飲食店出現 T10 旅館数15軒その内旅館11軒木賃宿4軒. 初の湯村温泉旅館案内発行	T 2 甲府—湯村間乗合馬車運行 T12 小沢自動車協会 甲府—湯村—敷島間乗合自動車運行 T13 御岳昇仙峡探勝道路改修 T15 山梨開発協会 甲府—湯村—葦崎間乗合自動車運行
第3期	観光地としての成立期	(昭和)1928	S 3 甲府資本 新規源泉掘削	S 2 土産品店出現 S 5 甲府資本 旅館開業(初の外来資本)	S 3 身延線富士—甲府間開通 S 6 中央線甲府—八王子間電化
		1934	S9~11 新規源泉 掘削盛ん. 鷺の湯等自然湧泉枯湯	S11 湯村温泉旅館商業組合設立 S12 芸妓10数人甲府より移住 S15 旅館数18軒 収容人員788人 S20 湯村温泉旅館組合設立 S22 芸妓置屋設置 S24 湯村温泉観光協会設立	S14 旅館組合 甲府—湯村間木炭乗合自動車運行. 浴客約3万人 S24 湯村新道拡張
第4期	観光地としての発展期	1950	S25 御岳昇仙峡 秩父多摩国立公園に指定. 日本観光地百選溪谷の部で首位当選	S25 射的・パチンコ店出現. 土産品店・飲食店の専門化. 旅館数20軒 収容人員687人	S25 観光協会 甲府—湯村間乗合自動車運行. 浴客約6万人
		1952	S27 御岳昇仙峡 特別名勝指定 S29 鷺の湯再開発	S31 名古屋資本 旅館開業(初の県外資本) S32 旅館数28軒 収容人員1,057人	S26 中央本線 温泉週末列車「甲斐路」号運転開始 S29 湯村新道舗装
		1960	S35 甲府資本 共同源泉掘削	S33 湯村温泉協会設立 S35 Tホテル 下部温泉進出 旅館組合による観光宣伝活発化(~S40)	S33 新笹子トンネル完成 S34 新宿—昇仙峡間直通バス運行(祝休日)
		1961	S36 甲府東郊に石和温泉開発	S36 国際興業 有力旅館買収	S35 中央本線 新宿—松本間デューセルカー急行運転
		1963	S38 甲府資本 湯村北西郊に源泉掘削	S39 昇仙峡ロープウェイ完成 S40 Tホテル 石和温泉進出 S41 旅館数32軒 収容人員1,760人	S41 浴客約24万人 S42 新御坂トンネル完成
		1972	S47 鷺の湯改築	S46 旅館数29軒 収容人員2,130人	S44 中央高速自動車道富士吉田線開通 S46 甲府バイパス完成 S47 昇仙峡有料道路完成

軒，芸妓置屋10軒となっている。

表1は，こうした湯村温泉の発達段階について，事項別・年次別に一覧表を作成したものである。この表をもとに，観光開発の状況，資本の進出，浴客の性格の変化，観光産業の成立，源泉掘削状況等を概観することによって，第1期から第4期に至る時期区分を行った。

第1期 湯治場としての成立期（明治初期まで）

第2期 湯治場としての発展期（明治初期から大正末期まで）

第3期 観光地としての成立期（大正末期から1950年頃まで）

第4期 観光地としての発展期（1950年頃以降）

なお，湯治場は温泉地発達の初期の段階で入浴客の目的が病気の治療や保養を主としており，長期滞在の自炊客が多い。観光地はレジャーやレクリエーション等を目的とし，広域観光レジャー活動の一環としての宿泊基地の性格が強く歓楽性の機能が付随し，温泉の意義は副次的なものへ変化している。

II 第1期（明治初期まで）

この時期は湯治場としての成立期である。湯村の開湯は808年（大同3）と伝えられているが⁹⁾，もとより伝説のたぐいであり，正確な成立年代は未詳である。しかし，1656年（明暦2）の「甲陽軍鑑」⁹⁾，1684年（貞享1）の「御検地御水帳」⁹⁾，1751～1764年（宝暦年間）の「裏見寒話」⁹⁾，1814年（文化11）の「甲斐国志」⁹⁾等に湯村の項が記載されており，近世にはすでに存在したことが明白である。特に，「御検地御水帳」の中には，「湯村」として，

「一 家数十九軒

一 惣人数合六十七人 内男三十五人 女三十二人

（中略）

一 當村方ニ温泉一ヶ所 此屋敷一畝歩 是八御高内ニテ御引高ニ相成申候 依之村中ニテ支

配仕来リ 雨覆小屋之儀モ村中ニテ修理等仕来リ申候

一 湯屋舗差帰リハ村中ニテ御年貢御上納仕来リ申候

（以下略）

とあり，また，「裏見寒話」の「温泉並鉱泉」の中には，

「湯村 湯島村に作る。府より凡一里西の方。此温泉は腫物 濕病 疥癬 小瘡等に効あり。湯坪は葦屋根に脇厚板はめ貳仕なり。先年照廟御領分の時，戸田能登守寺社奉行動役の頃，此地に湯治せられ効を奏せしと，…（以下略）…」

と記載されている。このことは湯村が村民の共同湯として利用されただけでなく，一部上層階級の湯治場として成立していたことを示している。

源泉はすでに存在した高鉱泉（鷲の湯）の他に，近世中期には野湯鉱泉（谷の湯）と新湯鉱泉（弘法杖の湯）が農民の手によって掘削され，計3ヶ所を数えた⁷⁾。これら3源泉は田圃の中の自然湧泉で村持ちとされ，近世末期には湯村の全戸数32軒が湯株を持ち，特に鷲の湯は昭和初期に至るまで共同湯として管理されたのである⁸⁾。

III 第2期（明治初期から大正末期まで）

この時期は湯治場としての発展期である。1873年（明治6）1月山梨権令に就任した藤村紫郎は，湯村の湯治場としての機能を充実させるため，湯村（湯川橋）から関屋往還（湯村入口）に至る湯村新道（延長200m，幅4m）を開削した。それと同時に共同湯の一つである鷲の湯の浴舎を当時としては華麗なローマ式建築に改築したのである⁹⁾。

こうした藤村の積極的な開発に対して，湯村では旅館業を本格的に営業する農家が出現し，私有泉も新規に2ヶ所掘削された。しかし，温泉の利用形態は共同湯（特に鷲の湯）への外湯利用が主体をなし，内湯を所有した2旅館も内湯を併用したにすぎ

ない。

「日本鉱泉誌」¹⁰⁾によると、明治初期における湯村の旅館はいずれも共同湯付近に立地している。鶯の湯周辺数戸、谷の湯周辺3戸、弘法杖の湯周辺4戸と記載されており、10数軒の旅館が成立したと推定される。また、浴客は1879・80年(明治12・13)の2年間を平均すると、鶯の湯10,685人、谷の湯人数未詳(病馬2,640頭)、杖の湯2,925人とあり、年間約2万人が訪れたと推定される。

浴客の季節性は、「日本名勝地誌」¹¹⁾によると、「…道路平夷甲府を距る遠からざるを以て夏季に至れば浴客群を為す…」とあり、夏型を示している。

その後、1903年(明治36)の中央線(八王子—甲府間)の開通とともに、甲府—湯村間には馬車・人力車が運行され、1923年(大正12)には小沢自動車協会によって甲府—湯村—敷島間に乗合自動車の運行をみた¹²⁾。

こうした交通機関の発達に続いて、1923年には御岳昇仙峡が名勝として内務大臣から指定を受け、湯村では御岳昇仙峡への遊覧基地としての意識が高揚した。その間、中央線の開通を契機として当時の湯村第一の地主広瀬家が旅館経営に着手した他は外来資本の進出もなく、湯村は湯治場として平静を保ったのであった。

1921年(大正10)の「甲州湯村温泉旅館」¹³⁾という湯村最初の旅館案内をみると、源泉5ヶ所(共有

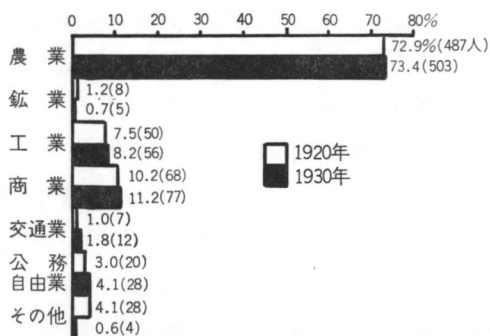


図2 湯村の産業人口構成(1920・1930)
国勢調査報告各年度により作成
大宮村についての産業人口構成である。

泉2ヶ所、私有泉3ヶ所)、旅館15軒(旅籠11軒、木賃宿4軒)を数えているが、その設備は貧弱なもので明治期と大きな変化はない。

図2は1920年(大正9)と1930年(昭和5)現在の産業人口構成を示したものである。1920年では農業人口が72.9%を占めているが、観光関係では商業人口10.2%、交通人口1.0%と少なく、農業地域としての性格が強かったことがわかる。

IV 第3期(大正末期から1950年頃まで)

この時期は観光地としての成り立ち期である。湯村ではこの期に至って新規源泉掘削と旅館数の増加がみられた。

最初に源泉掘削を実施したのは甲府で呉服問屋を営む笹本忠次である。彼は湯村を御岳昇仙峡への遊覧基地とするため、1928年(昭和3)12月に湯村入口付近で人工掘削に成功し、続いて1930年には常盤温泉(現常盤ホテル)を開業した。これが外来資本による旅館経営の最初である。こうした笹本の開発に対して湯村では大きな抵抗はみられなかった。それは、旅館の立地が温泉集落の場末であること、資本の系譜が湯村に近い甲府資本であることに起因している¹⁴⁾。

さらに、1934年には中巨摩郡の材木問屋河野勝雄は湯村東端の万寿森で新規源泉掘削に成功し、大衆浴場として甲府温泉を開業した¹⁵⁾。

こうした外来資本の進出に刺激を受けた湯村では地元有力者6名¹⁶⁾がそれぞれ源泉の掘削を開始し、集落の外縁部でも甲府資本の進出がみられた。源泉の新規掘削は旅館間関係では1934年(昭和9)1本、1935年8本、1936年2本が一気に行われた。同時に旅館の開業もみられ、地元資本5軒、甲府資本3軒の進出をみた。源泉は10旅館が12ヶ所に人工掘削したが、自然湧出である従来からの5源泉はすべて枯渇してしまった¹⁷⁾。

以上のような源泉掘削と旅館数の増加の中で、湯

村は観光地としての体裁を急激に整えた。1936年(昭和11)には湯村温泉商業旅館組合が設立され、湯村温泉としての組織統一が行われ、1939年には初の事業として木炭自動車を購入し、甲府―湯村間の運行に当った¹⁸⁾。また、飲食店・土産品店などの開業も行われ、いずれも1935年前後に本格的な営業を開始した。1937年には10数名の芸妓も成立し、歓楽性が付加されるに至った。

1940年現在、湯村には18軒の旅館が成立し、収容人員788人、部屋数287室を数えている。軒数は大正期の15軒と比較すると大差はないが、廃業や経営者の交替および新規の開業がみられる。次に、宿泊人員をみると、1939年現在、年間約30,840人を数え、その季節性(図3)は秋(9―11月)34.0%、夏(6―8月)33.7%、春(3―5月)22.7%、冬(12―2月)9.6%を示し、秋・夏季に宿泊客が集中する二季型

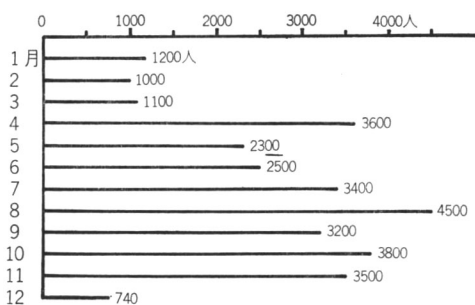


図3 湯村の観光季節性(1939)
日本温泉協会(1941):『日本温泉大鑑』p.841より作成

観光地の段階に到達している。月別では、夏の8月、秋の10月、春の4月に集中しており、御岳昇仙峡の新緑・紅葉の季節と一致している¹⁹⁾。

また、湯村への浴客は主に甲府及び県内出身者が中心をなし、県外は一部に限られていた²⁰⁾。

V 第4期(1950年頃以降)

この時期は観光地としての発展期である。湯村は第3期において従来の湯治場から観光地へと急変をとげたが、第2次世界大戦中は停滞し、わずかに東

京方面からの疎開学童や甲府の第49連隊の兵士等によって利用された。

しかし、第2次大戦では戦災を免がれたために観光事業の復興は比較的早く、まず、1945年には湯村温泉旅館組合を設立し、1947年には甲府観光協会の再建にあたってその有力なメンバーとなった。

また、湯村は観光組織の再建とともに戦後いち早く、山梨県・甲府市当局を中心に御岳昇仙峡の国立公園化運動を展開した。その結果、御岳昇仙峡は1950年7月に秩父多摩国立公園の一部に指定され、さらに同年10月には毎日新聞社主催の日本観光地百選²¹⁾ 渓谷の部で首位に当選した。これによって湯村の知名度は御岳昇仙峡とともに全国的に拡大したのである。

一方、交通条件も次第に改善された。1949年9月には明治初期に開削された湯村新道が幅4mから8mに拡張され、1954年には舗装された。その間、1949年に設立された湯村温泉観光協会では、1950年以來山梨交通からの業務委託により乗合自動車を甲府―鷲の湯間に運行した。また、1951年6月には中央本線にはじめて週末温泉列車「甲斐路」号が運転され、1959年6月には山梨交通・富士急行・京王帝都電鉄3社の相互乗り入れで、新宿―湯村―昇仙峡間に直通バスの運行(4月から11月までの日曜・祝日、1日2往復)が実施され、京浜方面との連絡が一段と便利になった。

こうした積極的な観光宣伝や交通条件の改善等によって、湯村は御岳昇仙峡の遊覧基地だけでなく、甲州観光の宿泊基地へと成長した²²⁾。

そのため、地元や甲府資本による旅館経営の他に県外資本の進出が行われた。1955年の東京資本、1956年の名古屋資本による旅館経営に続いて、1961年には大手の観光企業である国際興業が甲府資本の高級旅館を買収して進出した。

しかし、1961年1月、山梨交通(国際興業グループ系)によって、甲府市東郊の石和で温泉開発が行

表2 湯村における源泉所有状況(1971)

源泉番号	所有者の出身地	掘削年月	揚水方法	井戸深度	口 径	湧出量	泉 温	備 考
				m	mm	l/m	°C	
1	甲 府	昭和 3年12月	動力使用	—	—	—	—	
2	東 京	9	動力使用	174	—	50	38.6	
3	甲 府	9 11	動力使用	250	101	52	47	
4	地 元	10 4	動力使用	180	101	45	47	
5	地 元	10 5	枯 渴					
6	地 元	10 5	動力使用	226	101	32	39.6	
7	地 元	10	枯 渴					
8	地 元	10	動力使用	280	127	50	47	
9	地 元	10	動力使用	210	101	78	43	
10	甲 府	10	動力使用	188	101	34	47	地元資本を買収
11	甲 府	10 8	動力使用	188	127	20	47	
12	東 京	11 8	動力使用	197	127	91	47	甲府資本を買収
13	地 元	11	動力使用	210	101	20	39	
14	地 元	26	動力使用	316	76	1,300	32	
15	地 元	34	自 噴	200	38	159	38	
16	甲府・東京	35 6	動力使用	600	101	58	49.5	常盤ホテル等4軒で所有
17	甲 府	38 5	動力使用	215	76	200	32	湯村郊外で掘削

注1 1971年現在の源泉所有者(旅館経営)について

2 山梨県医薬課等での聞きとり調査により作成

われると、湯村の開発ムードは一気に低落した。石和で観光開発が急速に展開したためである。石和は従来の農業地域から観光地域へ急変し、1974年までに113軒(旅館組合加入数)の旅館が成立し、29軒の湯村をぬいて山梨県最大の温泉観光地に成長している。

そこで、湯村では石和へ進出して経営拡大を計る旅館業者が出現した。すでに、1960年に下部へ支店を出していた常盤ホテルが1965年に初めて石和へ進出し、1967年には2軒、1968年には1軒(後に湯村の旅館を廃業)の進出をみている。

源泉の所有状況については、表2の示す通りである。1971年現在、旅館業関係の源泉所有は17ヶ所を数えているが、第4期における新規源泉掘削は4ヶ所と少ない。これは1948年制定の温泉法や湯村の関係業者の自肅²³⁾によるものである。甲府資本等による湯村共同源泉を除くと、いずれも温泉集落の外縁

部に位置しており、1964年以降は1ヶ所も掘削されていない。

VI 旅館業の発達

ここでは、湯村の観光産業の中核を占める旅館業について検討したい。表3は、湯村温泉の形成過程を系統的に把握するため、旅館業についての系譜を追跡した。

湯村の旅館業は明治初期にすでに10数軒の成立をみたが、明治中期から大正末期にかけてほとんど増加せず、地元の農業出身者層で構成され固定化してきた。しかし、昭和初期になると、甲府からの外来業者が進出し、第2次世界大戦後になると、地元の他に県内及び県外業者も進出するようになり、資本の進出は地域的に大きく拡大した。

1971年現在、現存する旅館業の初代経営者の出身地は、地元21軒、甲府5軒、東京2軒、名古屋1軒

表3 湯村における旅館業の発達(1971)

地区	旅館番号	初代 経営者		開業年	廃業年	備 考
		出身地	前 職			
湯村	1	湯村	農業	近世	S 10	
	2	●湯村	農業	T 2		T 2 に共同湯を買収
	3	●湯村	農業	M 5		S 42 石和へ進出
	4	●湯村	農業	M 6		
	5	●湯村	農業	M 6		
	6	湯村	農業	M 6	S 20	
	7	●湯村	農業	近世		
	8	●湯村	地主	M 40		S 10 に移転
	9	●湯村	農業	M 元		S 10 に移転
	10	●湯村	農業	M 元		
	11	湯村	農業	近世	S 23	保養所となる
	12	湯村	農業	M 6	S 10	芸妓置屋を開業
	13	●甲府	印刷業	S 10		S 10 に 12 を買収
	14	湯村	農業	近世	S 20	
	15	湯村	農業	近世	S 10	
	16	●湯村	農業	S 10		S 10 に 15 を買収
	17	湯村	農業	近世	S 10	
	18	●湯村	農業	S 10		
	19	湯村	農業	S 10	S 36	
	20	●甲府	とび職	S 10		
	21	●湯村	農業	S 10		
	22	甲府	料理業	S 11	S 36	
	23	●東京	国際興業	S 36		S 36 に 22 を買収
	24	湯村	農業	S 27	S 44	
	25	●湯村	農業	S 25		
	26	湯村	農業	S 25	S 33	
	27	●湯村	旅館従業員	S 34		
	28	●名古屋	料理業	S 31		
千塚	29	●甲府	呉服問屋	S 5		S 35 下部, S 40石和へ進出
	30	●千塚	公務員	S 30		
	31	千塚	農業	S 29	S 41	下宿業へ
	32	●千塚	地主	S 38		
	33	●甲府	問屋	S 38		
塩部	34	●塩部	農業	S 22		
	35	塩部	農業	S 29	S 41	
	36	●塩部	地主	S 22		
	37	県内	料理業	S 29	S 44	S 43 石和で旅館開業
	38	塩部	農業	S 29	S 37	
	39	塩部	農業	S 30	S 37	
	40	塩部	農業	S 30		
	41	塩部	公務員	S 32	S 43	石和で飲食店開業
	42	●塩部	公務員	S 43		S 43 に 41 を買収
	43	●東京	映画館経営	S 30		S 30 に大衆浴場から転業
	44	大阪	商業	S 38	S 43	
	45	●塩部	不動産業	S 43		S 43 に 44 を買収
	46	●塩部	旅館従業員	S 38		34 の別館
山宮	47	●甲府	土建業	S 38		

注 1 M:明治, T:大正, S:昭和, 数字:年次を示す 2 湯村温泉旅館組合に加入した全旅館について
 3 筆者の聞きとり及び旅館組合資料により作成 4 地区は旧町名を用いた 5 ●印は現存業者を示す

からなり、地元出身者が圧倒的に多い。その前職では、観光関連業7軒、非観光業22軒を示し、中でも農業従事者が12軒と多く、いわゆる大手の観光企業は1軒と少ない。

一方、湯村では、1971年までに42軒の旅館が新規に開業している。その時期は、明治初期、1935年頃、1950年代の3時期で、廃業も1935～1945年、1960年代の2時期に増加しており、いずれも湯村の転換期（具体的には、湯村の発達段階の移行期、例えば、第1期から第2期への移行時期）と完全に一致している。

VII 湯村温泉の観光客動態

1971年現在、湯村の旅館数は29軒を数え、浴客は約20万人に達している。

ここで、Y旅館の宿泊台帳²⁴⁾をもとに観光客の市場構成（誘致圏）と季節性について表4と図4をまとめた。

観光市場は、関東の占有率67.8%を筆頭に以下、中部22.1%、関西5.6%と続くが、中でも、東京・神奈川が50.8%と比較的高率を示し、関西（ほとんどが京阪神）5.6%、愛知3.3%を含めると、いわゆる大都市からの入込み率が59.6%と高い。しかし、

表4 湯村の観光市場（1970）

観光市場	宿泊客	構成比
北海道・東北	161人	2.7%
関東	3,986	67.8
（東京・神奈川）	(2,986)	(50.8)
中部	1,298	22.1
（愛知）	(194)	(3.3)
（山梨）	(184)	(3.1)
関西	328	5.6
中国・四国・九州	108	1.8
計	5,881	100.0

注1 Y旅館の宿泊台帳をもとに作成

2 1970年現在（1970年1月1日～12月31日の集計）

北海道・東北は2.7%、中国・四国・九州は1.8%、山梨3.1%と少なく、遠隔地や地元からの入込み率が低い。

観光季節性は、春20.0%、夏18.5%、秋51.0%、冬10.5%を示し、秋季に圧倒的な高率を占めている。そのため、オフシーズンにあたる冬季とは大きな格差が生じている。これを月別にみると、秋の10月を筆頭に11月、9月、5月、8月に観光客が集中して

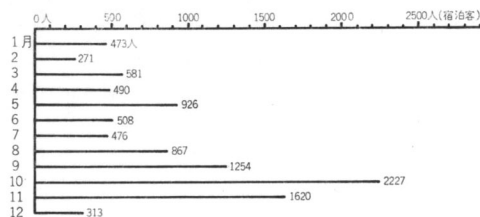


図4 湯村の観光季節性（1970）

資料・年次とも表4と同じ

おり、第3期同様に御岳昇仙峡の観光シーズンと一致している。

こうした傾向は、湯村が地元指向の低次な発展段階の観光地から脱皮して、大都市依存の観光地へと成長したことを物語っている。

近年の湯村は、石和温泉の出現で経営上大きな打撃を受けたが、旅館業を中心に着実に付帯設備の充実を計っている。

表5は、湯村と山梨県内の主要温泉地について、旅館の付帯設備等を比較検討するためにまとめたものである。旅館の日本観光旅館連盟加入率をみると、湯村は全旅館の75.9%を占める22軒が加入しており、石和・甲府の44.2%、下部の31.4%を大きく凌いでいる。国際観光旅館連盟や政府登録国観連加盟旅館についても同様な傾向を示しており、湯村の旅館が一般的に高級化していることがわかる。付帯設備でも、石和温泉の旅館に劣ることなく整備されており、特に、駐車場、卓球場、結婚式場、ダンスホール、会議場等の付帯が著しい。

このように、湯村温泉は旅館業を中心に付帯設備

表 5 湯村における旅館の付帯設備状況 (1971)

内 訳	温泉地		湯 村		石 和		下 部		甲 府	
	軒	%	軒	%	軒	%	軒	%	軒	%
旅 館 数	29	100.0	77	100.0	35	100.0	43	100.0		
日 観 連	22	75.9	34	44.2	11	31.4	19	44.2		
国 観 連	5	17.2	5	6.5	1	2.9	3	7.0		
政 府 登 録	4	13.8	4	5.2	1	2.9	1	2.3		
日観連収容人員	2,299人		3,672人		1,100人		1,435人			
一軒平均収容人員	104.5人		108.0人		100.0人		75.5人			
駐 車 場	21	95.5	33	97.1	10	90.1	16	84.2		
会 議 場	8	36.4	14	41.2	4	36.4	6	31.6		
ボウリング場	0	—	3	8.8	0	—	0	—		
プ ー ル	2	9.1	11	32.4	1	0.1	1	5.3		
テニスコート	0	—	0	—	0	—	0	—		
ゴ ル フ	1	4.5	1	2.9	0	—	0	—		
ダンスホール	11	50.0	12	35.3	5	45.5	3	15.8		
卓 球 場	16	86.4	23	67.6	7	63.4	6	31.6		
ビリヤード	4	18.2	5	14.7	2	18.2	1	5.3		
ボ ー ト	0	—	1	2.9	0	—	1	5.3		
結 婚 式 場	11	50.0	16	47.1	2	18.2	10	52.6		
日観連旅館数	22	100.0	34	100.0	11	100.0	19	100.0		

注 1 日本観光旅館連盟会員名簿昭和47年度版により作成

2 旅館数は旅館組合加入のもの 3 石和, 下部, 甲府は参考までにあげた 4 日観連: 日本観光旅館連盟. 国観連: 国際観光旅館連盟. 政府登録: 政府登録国観連 5 1971年現在

が着実に整備されており, 湯村の観光業者達は, 湯村の温泉地としての伝統や歴史性を強調した高級観光地, また, 結婚式や宴会, 会合等によるいわゆる都市観光地づくりに熱心である。

むすび

甲府市湯村を事例として, 温泉観光地としての形成過程の実態を論述してきたが, その結果, 次の点が明らかになった。

1) 第 1 期 (明治初期まで) 湯治場としての成立期で, 近世期にはすでに源泉 3 ヶ所が存在した。しかし, 地元農民層を主とした湯治場としての性格が強く, 旅館業の成立は明確に認めがたい。

2) 第 2 期 (明治初期から大正末期まで) 湯治場としての発展期で, 明治初期に共同湯である鷲の湯から関屋往還に至る湯村新道が開発整備された。これを契機として共同湯付近に旅館業 10 数軒の成立をみたが大正末期に至るまでほとんど増加せず停滞した。産業構成も農業への依存度が強く, 湯治場としての性格を継続したにすぎない。

3) 第 3 期 (大正末期から1950年頃まで) 観光地としての成立期で, この期に至って新規源泉の掘削と旅館数の増加がみられた。また, 地元の他に甲府資本の進出も行われ, 温泉集落の拡大をみたが, 源泉の乱掘で共同湯は枯渇し, 外湯は廃止された。しかし, 湯村の浴客は, 従来からの湯治・保養客の他に御岳昇仙峡への遊覧客が増加し, 湯治場から観光地へと大きく転換した。

4) 第 4 期 (1950年頃以降) 観光地としての発展期で, 第 3 期に続いて観光開発が実施された。旅館経営がその主力で, 甲府資本の他に県外資本の進出をみたが, 地元資本が圧倒的に多い。また, 外來資本による旅館は既存の温泉集落の周辺に点在しており, 甲府の都市化も影響して, 純粋な温泉集落を形成するに至っていない。

5) 近年の湯村は, 1961年に開発された石和温泉の出現で停滞しているが, 旅館業を中心に付帯設備が着実に整備され, 湯村の伝統や歴史性を強調した温泉地づくりが行われつつある。

付 記

本稿を作成するにあたり, 御指導, 御助言を頂いた東京学芸大学の青木栄一教授, また, 日頃, 御指

導を頂いている立正大学の服部銕二郎教授、千葉大学の山村順次助教授に心から感謝し、御礼申し上げます。

なお、本研究は都留文科大学卒業論文(1971年度)の一部で、立正地理学会研究発表大会(1973年度)で発表した内容に加筆したものである。

注および文献

- 1) 例えば、山村順次(1970):熱海における温泉観光都市の形成と機能. 東洋研究, 22号, 38~72./山村順次(1970):箱根における温泉観光地域の形成. 大東文化大学紀要(経済学部), 8号, 1~34.
- 2) 旅館組合事務所小関祐随氏の談による。「日本鉱泉誌中巻」によれば、源泉の発見年代は新湯鉱泉808年(大同3)、島鉱泉・野湯鉱泉1347年(貞和3)と記されている。しかし、近世初期の文献、例えば「御検地御水帳」では源泉1ヶ所とされ、「甲陽軍艦」では島の湯として記されている。そのため、他の2源泉は少なくとも近世中期に掘削されたと推定できる。
- 3) 甲斐叢書刊行会(1974):『甲斐叢書四巻』第一書房, 267~268. 甲陽軍艦乾品第二十七.
- 4) 内藤信晴(1925):『西山梨郡誌』山梨縣教育会西山梨郡支会, 738~739. 諸色明細帳嘉永元年甲十二月山梨郡湯村貞享元甲子年御検地御水帳三冊.
- 5) 甲斐叢書刊行会(1974):『甲斐叢書六巻』, 第一書房, 90~91. 裏見寒話巻之三温泉.
- 6) 甲斐叢書刊行会(1974):『甲斐叢書十巻』第一書房, 140p. 甲斐国誌巻之十村里部八山梨郡北山筋.
- 7) 広瀬幸也氏の談による。当初, 3源泉ともに村民の共有泉として管理されたが, 弘法杖の湯は低温のため温泉所有権は1913年(大正2)民間に譲渡された。1935年現在, 島鉱泉32軒, 野湯鉱泉7軒で管理されていたが, 1935年前後の新規源泉掘削で枯渇した。後, 島鉱泉は1954年増掘に成功し, 共同湯として管理され, 一般の浴客にも開放されたが, 1972年には, 外来資本にその経営を委託した。
- 8) 小関祐随氏の談による。
- 9) 小林定治氏の談による。
- 10) 内務省衛生局(1886):『日本鉱泉誌(中)』, 報行社, 186p.
- 11) 野崎左文(1894):『日本名勝地誌第3編東海道の部下』, 東京博文館, 21p.
- 12) 窪田友薫(1966):『敷島町誌』, 敷島町役場, 565~566.
- 13) 小林定治氏所蔵。
- 14) 1944年3月現在の湯村納税報国組合の役員名簿をみると, 笹本は組合長になっていて(副組合長・幹事は地元出身者), すでに湯村の指導的地位を確立している。
- 15) 甲府市(1949):『甲府市制六十年誌』, 甲府市役所, 916p.
- 16) 私有泉や共同湯の湯株を所有している有力者。
- 17) 小林定治氏の談による。
- 18) 広瀬幸也氏の談による。1938年(昭和13)3月「揮発油及び重油販売取締規則」の制定によって, 1939年には乗合自動車の運行回数が大幅に減少した。そのため, 湯村では30人乗りの木炭自動車を購入して浴客の輸送に当った。
- 19) 日本温泉協会(1941):『日本温泉大鑑』, 博文館, 841p. 921~922.
- 20) 広瀬幸也氏の談による。
- 21) 毎日新聞社及び全日本観光連盟(現在の日本観光協会)によって実施された全国観光地の人気投票。全国の観光地を資源別に山岳・湖沼・峡谷等に10分類し, それぞれベスト10を選出した。山岳では蔵王山, 湖沼では菅沼・丸沼, 峡谷では御岳昇仙峡が第1位に入賞した。
- 22) 広瀬幸也氏の談による。当時, 山梨県内では, 湯治場としての下部, 観光温泉としての湯村, 甲府の3温泉が有名であったが, 温泉情緒の点で湯村は群をぬいており, 場所の有利性とも相乗して甲州の宿泊基地として機能した。
- 23) 1958年3月には, 湯村温泉協会が設立され, 源泉掘削を規制している。
- 24) Y旅館は, 湯村の平均的な観光旅館で, 収容人員(一般)80名の規模である。山梨県や甲府市当局の観光統計よりも資料的価値があると判断し, 宿泊台帳を採用した。なお, M旅館の資料でもほぼ同様な傾向をつかむことができた。

The Formation of a Spa-Sightseeing Area at Yumura, Kofu City

Tatsuo URA*

This report is to reveal the actual state of a spa-sight-seeing area at Yumura, Kofu City; especially, to give a detailed account of the specific character of the capital invested in the tourist trade at the area by means of making exhaustive investigation on the existing hotel business at the area.

* Kawasaki City Technical High School.

In accordance with the result, the classification of the periods regarding the process of the formation of sight-seeing area and also the general survey on the distinctive feature in each period have been conducted.

The results are to be summarized as in the following :

(1) The 1st Term (Until the beginning of The Era of Meiji, 1868) :

It was a term for organizing an area as spa treatment. Though spa had already been in existence in the modern ages, it took a strong character as spa treatment chiefly for the classes of the local farmers and inhabitants. Therefore, it is still hard to conclude definitely that their hotel business was organized in those days.

(2) The 2nd Term (From the beginning of The Era of Meiji, 1868 to the end of The Era of Taisho, 1925) :

It was a term to grow it into a spa area. At the beginning of The Era of Meiji, 1868, a joint spa and also a new road of Yumura were developed and completely provided.

Taking this good opportunity, they organized more than ten hotels around their joint spa ; however, until the end of The Era of Taisho, 1925, the number of their hotels had not been increased at all; and a paralysis of their hotel business had been continued. And besides, they had been depending upon their agricultural works so strongly that the formation of their industry was nothing but a continuation of the character of their spa.

(3) The 3rd Term (From the end of The Era of Taisho, 1925 to around the year of 1950) :

It was a term for organizing a sight-seeing area. On this occasion, excavation of a new head-spring was conducted and also it was recognized that the number of their hotels had been increased. The advance of not only the capital invested in the area by the local people but also the other capital by the Kofu-people into their enterprises was conducted, and the extent of their spa settlements was expanded. However, their own joint spa was dried up owing to their confusing and disorderly excavation of a new headspring in the area. Their own customers were willing to visit Spa Yumura for their spa treatment as in the past. On the other hand, the number of vacationists at Spa Yumura was increased. After all, the transfer from a spa treatment area to a tourist area was realized on a large scale.

(4) The 4th Term (From around the year of 1950 downward) :

It was a term for their prosperity, and the development of their tourist industry was carried out in succession from the 3rd term mentioned above.

The operation of their hotels at the area was their main strength, and the advance of the capital from Kofu into their hotel business was conducted. However, the advance of the local capital into their hotel business had predominated over all other non-local ones.

The appearance of Spa Isawa in the same prefecture caused a paralysis of trade at Spa Yumura of late years. However, all the incidental facilities, revolving around their hotel business were steadily provided with necessaries. Therefore, it is studied that the switchover of their hotels to an advanced sight-seeing area, or a city for tourists by means of laying emphasis on a characteristic of their historic interest in Spa Yumura must be realized.